



集落構造からみた韓国歴史的集落の景観保全に関する計画論的研究 一安東・河回村と順天・樂安邑城を事例に一

朴, 延

(Degree)

博士 (工学)

(Date of Degree)

2016-03-25

(Date of Publication)

2017-03-01

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第6629号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1006629>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



論文内容の要旨

氏 名 朴 延

専 攻 建築学専攻

論文題目 (外国語の場合は、その和訳を併記すること。)

集落構造からみた韓国歴史的集落の景観保全に関する計画論的研究

— 安東・河回村と順天・樂安邑城を事例に —

指導教員 山崎 寿一

(注) 2, 000 字～4, 000 字でまとめること。

本研究は、韓国の代表的な歴史的集落である安東河回村と順天樂安邑城を対象にした景観保全の研究である。研究を行う際に、「集落構造 (社会構造・空間構造・生活構造)」から、韓国の歴史的集落の景観保全の課題を解き明かす。安東・河回村 (以下、河回村) は特に社会構造から、居住や生業が景観保全に関係しているという視点を、順天・樂安邑城 (以下、樂安邑城) は、特に風水に基づいた伝統的空間構造から、建物と周辺環境を一体的に捉えた空間構造の視点を設定し、景観保全の研究を進めている。

研究の背景として、建物の歴史的価値を重視する、物理的なカタチだけを保存する考え方には限界があり、環境物件などを含む面的保全の発想が必要であると考えている。また、韓国の歴史的集落の景観保全において、特に営みのような要素が考慮されてない点に、筆者は問題意識を持っており、地域住民の生活と関係している景観資源や、生活と関係する景観の捉え方は重視すべきであると考えている。このように、人が住まずに保存することに価値を置くのではなく、居住者が生活している物的環境としての歴史的集落を保全することを目標としている。

歴史的集落の景観保全の研究を行う際に、「集落構造 (社会構造・空間構造・生活構造)」の観点から、現代における歴史的集落の景観保全とその他の要素がどのように関係しているのかについて評価し、そのあり方を検証することを目的とする。

また、歴史的集落の景観をどのように保全していくのかについての課題を持っており、生活環境をどのように創造して、新たな計画概念を提言とするのかについての「計画論的研究」である。

序章では、歴史的集落の類型・概念や文化的景観などの用語を整理する。また代表的な日韓の研究を整理し、位置づけを明確にする。さらに、日韓における歴史的環境保全の関連制度の展開の実態と特徴を明確にした上で考察を行い、課題を明らかにする。

日本の場合、住民主導であり、今あるものを保全する生活保全型であると言える。また重要伝統的建造物群保存地区に110箇所が指定されている。韓国の場合、行政主導であり、文化財保護法による厳しい原型維持の手法に基づいた復元型の整備の特徴を持つ。また国の法制度（文化財保護法）により8箇所が指定されている（重要民俗文化財7箇所・史跡1箇所）。

現在韓国は、文化的景観については法制度に定められておらず（文化的景観が議論されている状態）、生活と文化を尊重した仕組みは参考にすべきであると考えている。また、日本や欧米の先進事例および制度をそのまま韓国に適用することは難しく、地域の文化や生活を尊重した仕組みで取り組む必要があると判断する（風水・郷約など）。

第1編の「制度論」では、韓国の河回村と樂安邑城がどのような制度で保護されているのかその展開と実態を明らかにした。まず、韓国の文化財庁による環境整備の方針として、歴史的集落を1900年代以前の姿に近づけようとする考え方があり、それが現在に至っている。このような方針の下に、いわゆる「復元的手法」を用いた歴史環境の保護整備の特徴を持っている。このように、国の文化財保護法を中心とした原型維持の仕組みから、2000年代以降は文化財保護制度と都市計画法の関係性および農地法（農業振興）などの関連制度と総合的な法整備になっていることを明らかにした（文化財保護と周辺環境を一体的に捉える視点）。

第2編の「河回村における景観保全とコミュニティ」では、2010年8月1日に韓国の歴史的集落としては初の世界遺産に指定された安東河回村を対象に、どのような社会構造になっているのかまた居住と生業がどのように景観保全と関係しているのかについて明らかにした。

河回村は居住分布及び屋根の材料からみて柳氏が中心となった氏族マウル（ヤンバン集落）の特徴が維持されており、河回村の多様な居住スタイルがみられた。112世帯の内、常に住んでいる世帯（常時居住）や空家だけでなく「2拠点居住」がある。その世帯数は、112世帯の内、常時居住（70世帯）、2拠点居住（28世帯）、空家（14世帯）である。2拠点居住の場合、約半分程度の世帯がソウルなどの大都市に家を持ち、二つの拠点で居住している。樂安邑城の場合、居住するか家を売るかという居住スタイルと大きな違いであり、知見としてあげられる。

河回村の2拠点居住を行っている世帯は、河回村以外に居住する時には、親戚や知人（前小作農を含む）に月約2~3万円を支払い、家や庭を管理してもらう仕組みになっており、景観保全に寄与していることが分かった。

第3編の「樂安邑城の空間構造と景観保全」では、どのような伝統的構造になっているのか風水に基づいた空間構造を明らかにした。また土地利用と環境整備の変遷からその実態と特徴を明らかにした。

まず、樂安邑城は三つの里に対応する構成原理（堂山のような共同空間が存在）が存在しており、三つの里で構成されている空間構造と組み合わせ、大きな樂安邑城の全体としての構成原理を持つ「二重構造」になっていることが特徴としてあげられる。また、1970年代からセマウル運動（韓国の農村近代化運動）により伝統的な民家が変貌した一般的な中心集落を、風水に基づく空間軸に対応して、点・線・面的要素に分類して環境整備について分析した。さらに環境整備を行う際に風水を念頭に置いた環境整備が行われたことを指摘した。このように空間構造と環境整備が関係していることや風水の現代的活用について着目したことは重要であり、意義があると考えている。

(氏名： 朴 延 NO. 4)

本研究では、韓国の歴史的集落の景観をどのように保全するべきであるか示すことを目的に、集落構造（社会構造・空間構造・生活構造）の視点を取り入れ、これらが景観保全と密接に関係している点について明らかにした。また、これらについて評価を行い、計画論として結論を導き出した。さらに、本研究は歴史的環境をどのように活かすかについての計画論的研究であり、今後一般の農村集落に適用することを課題とする。

(別紙1)

論文審査の結果の要旨

氏名	朴 延		
論文 題目	集落構造からみた韓国歴史的集落の景観保全に関する計画論的研究 —安東・河回村と順天・樂安邑城を事例に—		
審査委員	区 分	職 名	氏 名
	主 査	教 授	山崎 寿一
	副 査	教 授	黒田 龍二
	副 査	教 授	遠藤 秀平
	副 査		印
	副 査		印
要 旨			
本研究は、韓国の「歴史的集落」を対象とした景観保全に関する研究である。ここでは、日本の文化財保護法の「重要伝統的建造物群保存地区」に相当する韓国の歴史的集落の現状と制度展開を把握したうえで、研究対象を慶尚北道に位置する安東市・河回村と全羅南道に位置する順天市・樂安邑城を選定し研究を進めている。 韓国の歴史的集落は、都市化、過疎化、近代化、観光化や高齢化の進展等の社会変動の只中にあり、保全に関して制度面の整備、歴史的な建物の保存・復元や地域振興・観光地としての整備・活用が進められてきた。しかし従来の歴史的集落の保全では、文化財保護の視点、地域振興、観光地としての活用の視点からの環境整備が重視され、歴史的集落の生活的・文化的・社会的・環境形成的な価値や、生活空間としての集落の維持・持続、景観の保全・創生に目を向けた計画論的な課題設定のもとでの研究が十分ではなかった。本研究は、従来の研究で欠落していた、集落の社会構造、空間構造と景観保全の関連や居住者の生活・生業、居住スタイルと景観保全の関連に目を向けており、空間構成論・土地利用規制論的な視点から研究を進めている点、集落構造から歴史的集落の保全に取り組んでいる点に本研究の意義がある。 韓国の集落類型には諸説があるが、歴史地理学、社会学においては同族集落と非同族集落の分類が定説である。韓国の文化財保護法で指定されている8か所の歴史的集落では、同族集落が6か所、非同族集落が2か所である。河回村は前者、樂安邑城は後者の典型的な集落であり、このような社会構造の差異が歴史的集落の特徴や景観保全の在り方にどう関係しているかということが研究上の関心、課題として設定されている点に学術的な特徴がある。また韓国の伝統集落の多くが伝統科学といわれる風水説に基づいて形成されており、ここで取り上げる歴史的集落はすべて風水説に基づいて形成されたものである。ここでは近代以前の集落の空間構造を風水との関連から把握したうえで、近代以降の集落空間の変容や近年の歴史的集落の景観保全に関連する政策・計画・整備事業の展開を整理、評価している点にも研究の特徴がある。 本研究は、研究の目的、方法、基本概念、既往研究を整理し、研究の位置づけ、構成を示した序章と本論3編7章、及び結章から構成されている。 本論1編は、歴史的集落の景観保全に関する制度論で、日本との比較の視点から、韓国における歴史的集落の保全に関する制度の展開過程とその特徴を分析し、韓国の歴史的集落の実態とその特徴・課題を明らかにしている。ここでは韓国の文化財保護法で指定されている歴史的集落は8か所（重要民俗資料7箇所・史跡1箇所）であり、原型保存、原型復元を基本とする厳格な景観保全がなされていること（日本の重伝建地区は110か所、2015年）、建造物だけでなく、建物と周辺環境を一体的に捉えた空間構造の視点や日本の文化的景観や生活・生業・文化と景観を一体的に捉える視点の重要性を指摘している。本論2編・3編は詳細なフィールドワークに基づく事例研究であり、2編では韓国初の世界遺産に指定された安東・河回村を対象に、歴史的環境保護制度と景観保全、集落の社会構造、居住スタイル・生業と景観保全の関係を明らかにしている。ここでは河回村は柳氏の同族集落であり、居住形態や社会運営面で特色があること（共同性が強い）、集落の住民組織が集落の保存の中心になっていること、集落外に転出するものが少なく、転出しても河回村の住居、農地を維持する二拠点居住するものが多いのが特徴で、住居や農地は在村者が維持し、二拠点居住者も在村者の協力のもとで維持されていることを明らかにしている。3編では順天・樂安邑城の近代以降の土地利用・景観の変遷を明らかにしたうえで、風水に基づいた空間構造を明らかにし、土地利用と環境整備の変遷の詳細な分析を行っている。ここでは都市計画や農業振興計画等が一体となって景観を保全する制度面での特徴、行政主導の積極的な土地取得、近代以前の住居・景観の復元による景観保全の仕組みを明らかにしている。樂安邑城の住居			

氏名	朴 延
は藁葺であり、屋根の葺き替えが、文化的な景観となっている。また城壁内の空地が菜園として利用され、城壁外の農地が維持されることによって景観が保全されている。集落中心部の広場や共同施設の整備、民家の民宿としての活用、城壁外への商業地の整備等、農業・観光との関係にも配慮した景観整備が進められていること、近年の景観整備・環境整備には風水との関連も配慮されていることを明らかにしている。 結華では、河回村、楽安邑城の研究成果を比較・分析し、以下に示す有益な知見を導出している。 ①河回村の伝統的な空間構造は、立地については「背山臨水型」、建築物など具体的な空間構成については「蓮華芙水型」、楽安邑城は、立地については「背山型」、具体的な空間構成については「行舟型」の風水に基づいていることを、現地で入手した古図と風水師からの証言の分析結果からまとめている。また両集落は大きな風水による立地（主山を中心する）と、具体的な空間構成（神木や宗家などの重用な建築物など）によって形成されていること、方位より自然地形が重視されていることを明らかにし、具体的な空間構成のモデルを提示している。韓国の歴史的集落は風水に基づく空間構造を基本に形成されており、その整備も伝統的空間構造の文脈を継承・整備する方針で進められている。 ②「非同族集落」の楽安邑城は階層的・血縁的な側面において河回村に比べて繋がりが弱く、共同性も異なっていること、楽安邑城の場合、邑城全体としての共同性は比較的に弱いと考えられるが、三つの里によって構成されており、東内里・南内里・西内里の各「里」による共同空間（堂山）での祭事が現在も継続されていること、また邑城全体（文化財保護区域内）としての楽安邑城保存会がある二重構造になっていることなどの社会構造面での特徴を明らかにし、歴史的集落の管理形態に社会構造が影響していることを示した。 ③居住形態の特徴と景観保全の関係については、河回村では112世帯のうち、常住70世帯・空家14世帯・二拠点居住者が28世帯で、強い共同性によって地域外での生活の比重の高い家を在村者がサポートする「二拠点居住」者への支援体制があること。二拠点居住の場合、約半分程度の世帯がソウルや大邱などの大都市に家を持ち、二つの地域に拠点を持つもので、河回村外に居住する世帯に対して、親戚や前小作農であった人に管理料を支払い、家や庭を管理や掃除をしてもらう仕組みになっており、空家として景観が乱されることなく、景観が維持されていることを明らかにしている。それに対して楽安邑城の場合、80世帯のうち1世帯だけが空家となっており、二拠点居住はみられないこと、河回村と比較して、楽安邑城は邑城内で居住をするか、そうではなく家を売り、他の地域に移るかの2択との大きな違いがみられたことを明らかにしている。居住様式と共同性の関連が住宅や農地の管理、景観保全に大きな影響をもっていることを明らかにしている。今後歴史的集落を保全する際にも重要な知見である。 本研究は、集落構造（集落の社会構造、空間構造や生活・居住・生産）に着目することから、韓国の歴史的集落の景観をどのように保全し、創造するのかという問題意識から研究をしたものであり、詳細なフィールドスタディを通じて、景観保全に関する具体的で重要な知見を得たものとして価値ある集積である。提出された論文は工学研究科学位論文評価基準を満たしており、学位申請者の朴延は、博士（工学）の学位を得る資格があると認める。	